

LETTER

GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO

Contents

1. Guest Speaker Seminar「我が国の観光政策—世界が訪れたいくなる日本へ」(大庭あかり)
2. 研究室の窓から(第14回)(目黒克幸)／大学院講義レポート(第15回)(長菜々子)
3. 学生インタビュー(第23回)(金子智広さん)
4. STIG公開講義 "From New Lens Scenarios to Pathway to Net-Zero Emissions from Energy"(小松功武)／トピックス

Guest Speaker Seminar

「我が国の観光政策—世界が訪れたいくなる日本へ」

国際公共政策コース2年 大庭あかり

去る7月5日、火曜5限の国際交通政策では初のGuest Speaker Seminarとなる田村明比古観光庁長官の講義が行われました。もともと、本講は部局横断型のSTIGプログラムの一環として開講されており、公共政策大学院以外にも工学系など多様な専攻の学生が受講しています。また、Guest Speaker Seminarは東京大学すべての学部・研究科の学生に公開されており、今回は普段見かけない学生も何人か加わって、講義開始前に教室はほぼ満員になっていました。

冒頭に本講全体のモデレーターである宿利正史先生から田村明比古観光庁長官の経歴の簡単な紹介があり、続いて60分ほどの講義が始まりました。これまでの日本の観光政策の歩みを振り返り、少子高齢化の進行によって内需が縮小していく日本において観光は重要な成長産業であるという、核となる考え方が提示されました。次に、ビザの発給要件の戦略的緩和、免税店拡大、入国手続きの迅速化といった政府の取り組みと、その成果としての訪日外国人観光客1900万人達成というお話がありました。後半は、順調に訪日観光客が増加していく一方で、将来的には宿泊施設不足や一部地域への観光客の集中、経営の知見を持つ観光人材の不足、地方の疲弊による公共交通機関の縮小や観光地の魅力低下といった課題が生じうるといった問題も取り上げられました。最後は、これらを踏まえた上で今後の日本の観光政策をどのようにすべきか、という受講者への問いかけで締めくくられました。

興味深かったのは、宿利先生も事前に予告されていた通り、今回の観光政策というテーマが、一種それ以前の講義を総括するような一面を持っていた点です。これまでの講義で、私たちは空港整備・運営、運輸産業の在り方、鉄道網の整備といった多様な側面から、実地視察も交えつつ交通政策について学んできました。観光政策は外国から主に空路で人を引き、国内を効率的に移動し、かつそこで快適な経験をしていただくという多くの要素を包含する、いわば交通政策の応用問題としての側面を持っているのだという発見がありました。

講義の後、30分ほど受講者との自由な議論の時間が設けられました。東京オリンピック・パラリンピック開催を数年後に控えるなか、観光は学生の関心も高いテーマであり、途切れることなくディスカッションが続きました。学生質問のトピックは、キャッシュレス環境や公衆無線LANの整備といったハード面の技術的なテーマから、ムスリムの食文化への配慮、観光人材の育成や英語教育といったソフト面の課題まで、多岐にわたりました。

またこのディスカッションでは講義に足を運ばれていた、現在公共政策大学院で客員教授を務められている竹内春久前シンガポール大使からの発言もありました。観光庁が観光政策の司令塔である一方、大使館は現場の最前線で観光政策を実行する役割を担っています。実務家の先生が肌で感じられた経験に基づくPRの提案や現場のニーズを踏まえたコメントを頂くことで、さらに理解が深まりました。国際交通政策の講義の特徴は異なる専攻の学生が、交通政策という技術・経済・政策という様々な要素を内包する共通のテーマに関心を持つことによって、様々な観点から問題を切り取ることができる点にあると日々感じています。このディスカッションは公開授業にすることによって、さらに新しい視点が加わり、知的な刺激を受けられることが実感できるものでした。



第14回 研究室の窓から

現実的な政策トピックを授業で 取り上げて学生の潜在能力を伸ばす

教授 目黒 克幸



昨夏にGraSPPの教員として着任してから、早いもので1年が過ぎようとしています。GraSPPでは、行政官としての実務経験も踏まえたグローバルな視点からの金融システムや金融規制に関連する科目の授業を担当しています。

先のSIS2セメスター(夏学期)で担当した科目の一つに"Case Study: FSB's Global Financial Policy-Making"があります。この授業は、世界金融危機後のグローバルな金融規制政策の中心に位置する国際組織、FSB(Financial Stability Board: 金融安定理事会)の活動に焦点を当て、FSBの実際の公表文書を教材として、個別の政策トピック毎に発表者を割り当てた上で、FSBでの政策立案過程や合意された政策の実施状況についてゼミ形式で学ぶという、やや野心的な試みでした。幸いなことに、履修者が自ら進んで幅広い政策トピックをカバーしてくれたこともあり、大変盛り多い授業になったかと思えます。

授業で扱った政策トピックの多くは極めて現実的なものです。例えば、去る6月の英国のEU離脱の国民投票をきっかけとして欧州の金融市場は波乱含みの展開が続いていますが(本稿執筆の7月現在)、個別の要因として、英国の不動産に投資する一部のファンドが解約停止措置に踏み切ったことや、イタリアの銀行セクターの不良債権問題への対応をめぐるイタリア政府とEUとの対立などが指摘されています。これらは、FSBの重点的な政策課題であり今回の授業でも扱った「シャドー・バンキング(における流動性リスク)」や「金融機関の実効的な破綻処理の枠組み(における公的資金利用のあり方)」とそれぞれ密接に関連する問題です。今後の展開次第では、FSBによる取組みの成果が改めて確認されたり、逆に新たな政策課題が見出されたりするかもしれません。

政策研究の目的として「理論と政策実務の研究を通じて現実の世界を見通す力を養う」ことがあげられるかと思えます。GraSPPersがこうした力を涵養して現実の世界へと巣立って行けるよう、教員として少しでも貢献できればと考えています。

大学院講義レポート

第15回 Report

法政策コース1年 長 菜々子

講義科目:地域政治B(現代中東の政治)

担当教員:池内恵准教授

近年、世界で相次ぐISによるテロや人質殺害事件、その報復としての空爆など、中東関係の話題が世間を賑わせることが多くなっています。一方で、私にとって中東は「遠い異国の地」であり、頻りにニュースを目にしているにもかかわらず、漠然としたイメージしか持っていませんでした。そんな中、シラバスでこの授業を見つけ、注目度が高まる中東地域について学問的観点から学べる貴重な機会だと思い、受講を決めました。

授業は講義形式で、「アラブの春」が起こるに至った背景や、同じような政治体制をとっているように見える国々が、内包していた差異により異なる経過をたどっていった経緯などを学んでいます。一般に中東というとイスラム教についての勉強というイメージが強くなりがちですが、この授業では宗教的観点ではなく、あくまで政治的・歴史的観点から中東社会を分析していきます。また、世界で多くの国が民主化していく中で、中東には「アラブの春」まで権威主義体制が続いた国が多いのはなぜかといった点については、文化的背景も交えながらご説明頂きました。中東という概念自体が流動的であること、域内国家間の格差が非常に大きく単純な協力関係にはないこと、欧米など域外の大国の影響を大きく受けながらそれを利用してきたこと、多様な政軍関係が政治動静に大きな影響を与えること……様々な政治権力関係の中で紡がれてきた歴史を学び、これまで全く知らなかった中東の姿が浮かび上がってくるようで、毎回新鮮な驚きがあります。

中東に関する情報は私たちの身の回りに増えていますが、このように各国の政治を深く掘り下げて学ぶ機会にはなかなか巡り合えないものと思えます。激動を続ける中東への理解を深めたい方は、ぜひ受講してみてください。



学生 インタビュー

第23回

金子 智広さん (国際公共政策コース1年)



—出身は福岡で、大学は神戸、そして大学院は東京ですね。

大学受験のときに、両親が「九州から出なさい」と勧めたので、神戸大学法学部に進学しました。そこで国際政治への興味が募り、交換留学で1年間オランダのライデン大学で学びました。オランダは国際法研究が進んでいます。ライデン大学はオランダ最古の大学で、日本学科が世界で最初に設置された大学です。留学から帰ってきたら、就職活動がほぼ終了していて、それなら専門知識を積んで2年後に就職しようと思い、GraSPPを受けて合格しました。

GraSPPに入学してまだ日が浅いので(※インタビューは6月末)手探り状態ですが、意外と受講者数が多い授業が多いなあという印象です。西沢先生の授業は僕以外は全員2年生で、場違いなところに来ちゃったなとちょっと思いました(苦笑)。

以前から人権に関心があり、国際NGOであるセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンで、神戸大学時代にはアルバイト(大阪事務所)で働き、今は週2日、政策提言等を行うアドボカシーのインターンとして外務省に足を運んだり、貴重な経験を積んでいます。セーブ・ザ・チルドレンはもともとイギリスで設立され、その創始者(エグランティン・ジェブ)は、現在の国連の「児童の権利に関する条約」の元となった「子どもの権利宣言」を1924年に起草しました。

いずれは国際機関で働きたいという希望を持っていますが、最初は企業に就職して力をつけたいと思っています。自分が猛スピードで成長できて、仕事の裁量も大きそうなコンサルタント企業などを候補に考えています。まずはインターンからと思い、数社に応募して結果を待っているところです。

—海外の旅先で印象に残っているところがあれば教えてください。

オランダ留学時代にエクアドルに行きました。コーヒーが大好きで、コーヒーにどっぷり漬かれる環境に身を置きたかったんです。エクアドルでは、コーヒー農家に滞在でき

るし、コーヒー生産組合で働かせてくれるということでした。コーヒー生産国には貧困問題がつきもので、国際協力に興味があったという理由もあります。小規模な生産農家で収穫を体験し、カフェでも働きました。トータルで1ヶ月半くらい滞在していました。人生で一番おいしかったコーヒーは、エクアドルで飲んだコーヒーです。

コーヒーが好きになったのは、大学時代、友人がアルバイトしていたコーヒーチェーン店で自分もアルバイトを始めたのがきっかけです。自宅には、ミルをはじめコーヒーグッズがひと通り揃っています。エスプレッソマシンもあるので、エスプレッソも淹れられます。豆は信頼している個人経営の店で購入しています。チェーン店の豆は、いつ焙煎したかわからないのであまり買いません。

コーヒーは産業支援の対象になることも多く、国際協力機構(JICA)等の国際団体が産業としての可能性に着目して、ルワンダ等の国でコーヒー栽培を支援しています。また、東京大学東洋文化研究所の教授で開発経済が専門の池本幸生先生が定期的にコーヒーサロンというセミナーを開催していて、その手伝いもさせてもらっています。次はサステナブル・コーヒーがテーマなので、それについて調べてきてと言われています。コーヒーとは一生付き合っていくつもりです。

(インタビュー・文責 編集担当)



STIG 公開講義 (Wim Thomas 氏)

“From New Lens Scenarios to Pathway to Net-Zero Emissions from Energy”



5月26日にシェルグループの首席エネルギー顧問官であるWim Thomas氏が講演を行いました。Thomas氏はエネルギー情勢とシナリオプランニングの大家であり、4月には安倍首相や黒田日銀総裁とも意見交換を行っています。本講演はSTIG科目として開講している「事例研究・政策環境検討手法としてのシナリオプランニング:理論と実践」の一環としてシェルグループのシナリオプランニング活動について講義いただきました。講演は2部構成となっており、前半部分はシナリオプランニングの意義とその手法の抽象的な話を、後半部分は実際にシェルグループが作成したシナリオと現実世界のギャップなど具体的な話をさせていただきました。

第1部ではシナリオプランニングの意義とはなにかという問いから始まりました。冒頭、アメリカ国防長官だったDonald Rumsfeldの「There are known knowns」の台詞が紹介され、シナリオプランニングはただの将来予測ではなく、現状リスクであると認識できていないリスクを可視化することに意義があると述べました。その後シナリオ手法の解説が続きました。主体にとって理想的な未来と、それがどのよう



なりリスクによって異なったシナリオに分岐しうるかを考える“official- alternative scenario”や、達成しなければならない目標があるときにどのような経路をたどれば達成できるかを考える“normative scenario”といった手法が紹介されました。

第2部では、まずシェルグループが作成したNew Lens Scenariosの簡単な説明から始まりました。これは2013年にシェルグループが作成したシナリオで、世界の未来を大きく二つのシナリオ (Mountainシナリオ・Oceanシナリオ) に分岐させた作品です。Mountainシナリオでは政府や既得権益層がこれからの世界をデザインしていき、長期的に緩やかな成長が続くシナリオであるのに対して、Oceanシナリオは人数的に勝る中間層の声が大きくなり政府に強く働きかけることで社会全体に急激な変化が生じるシナリオです。この二つのシナリオを経済成長という観点からみると、Oceanでより大きな成長を果たすと予想されています。しかし、エネルギー消費・地球温暖化という観点から比較するとOcean Mountainより多くのエネルギーを消費し、結果として地球の気温が高くなるという予測が出ています。しかし、比較的エネルギー消費の少ないMountainであっても、現在世界で共通目標となりつつある「産業革命以前と比較して気温上昇を2度未満に抑える」という目標を達成できません。「シェルグループが現状から導いたシナリオ」と「地球温暖化の防止というnormativeな目標」の間にあるギャップをどのように捉え、どのように埋めるのかを、講演を聞いていた誰もが考えたと思います。この講演の中に明快な答えはありませんでしたし、おそらくまだどこにもないものなのでしょう。しかし、このギャップを多くの人に認識してもらい、問題意識を持ってもらうことこそシナリオプランニングの意義であるとも感じました。

経済政策コース2年 小松功武

●ご寄付のお願い●

ご寄付の方法など詳しくは右記サイトをご覧ください。 <http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/donation/>

●ホームカミングデイ開催●

10月15日(土)にホームカミングデイが開催されます。GraSPPでは講演会と懇談会を開催する予定です。修了生の皆さん、こぞってご参加ください。

TOPICS

編集後記

数年前に学生インタビューに登場した卒業生から、会社を辞めてかねてから取り組んでいた地元の子どものための活動に専念する、という連絡をもらいました。驚きよりも嬉しさのほうが勝りました。コミュニティの一員としてコミュニティのために力を尽くすというのも、公共的な活動の一形態です。GraSPPの理念を身をもって示した卒業生に、心からのエールを送ります。(編集担当)

vol. 45 NEWS LETTER

【編集・発行】東京大学公共政策大学院 【発行日】2016年8月5日

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp
<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/>